

普勸坐禪義

原めるに夫道本圓通 争てか修證を
ひん宗乘自在何そ功丈を普賢さん
況や全体過かに塵埃を出一孰れか拂
式れ手段を信せん 大都當所を離れ
山豈修行の脚頭用ゆる者成んや然
れ共毫釐差ありバ天地懸に隔り違
順纒不起れば紛然として心を失す直
饒會小誇り陪に豊かたして敵目地に智
通を得道を得心を以めて衝天の志
氣を與寺し入頭は邊量か逍遙を難

幾と出身の活路を虧闕す況や彼れ
祇園の生知たる端坐六年に蹤跡見
つし少林の心印を傳ふる面壁九歳
聲名尚聞ゆ古聖既不然り今人何そ
辨せざる所不須く言を尋 語を逐
て解行を休すへし須く回光返照し
退歩を與すべし身心自然に脱落
して本來の面目現前せん 恁麼の幸
を得んと欲せば急不恁麼事を務めよ
夫參禪の淨室且敷飲食節あり

諸縁を放捨して萬事を休息して善惡
を思す是非を管する事ふかれ心意
識の運轉を停め念想觀の測量を
止めて作佛を圖る事勿_レ坐卧に拘
らんや尋常坐所は厚く坐物を敷き上
に蒲團を用ふ。右之足を以て左の脛の
上に安し左の足を右の足脛の上に安す半_△
或結跏趺坐或半跏趺坐謂結跏趺坐
先_{續々}跏趺坐ハ但だ左の足を以て右之
脛の上に安す半_△を履ふなり寛く衣帶

をかけた齊整成らしむ。次に右の手
を左の足の上に安し左の掌手を右の掌手の
上に安す兩の大母指面にて相柱ふ乃ち正
身端坐して左にそはた右に傾き前に
躬まり後ハ仰ぐ事を得さし耳と肩
とを對し鼻と臍とを對せしめん事
を要す舌上の脛_ノにかけて辰齒相着け
目須_常開_ノ鼻息微_通し
身相既_調へて欠_氣一息し左右に搖
振して元々として坐定して箇の不思議

底を思量せよ不思量底如何思量
せん非思量是乃坐禪之要術也謂
坐禪は習禪仁非唯是安樂之法所
也著提拈究盡なる乃修證也公案
現成羅籠未到らば若此意得れば
龍之水を得るの如虎乃山に靠るは
將に知へし正法自ら現前し昏散
先撲落する事若し坐より起る
徐徐として身を動かさず安詳として
起る一卒暴成可不當て觀る超成

越聖坐脫立亡も此力に一任なる事
況や復指竿針鍵を拈らば轉機拂
拳捧喝を與する此證契も未
是思量分別乃能解る所に非
宣神通修證乃能く知所せん
色乃外乃威儀多る一那智見
乃前乃軌則に非ざる物成らん然は
則上智不愚を誦せり利人鈍者を
簡事成り専一に功夫せば正に是れ
辨道也修證自染汚せり趣向更に

是平常成物成り凡夫自^レ界他^レ方西
天東地等佛印^ヲ持志^{シテ}一宗風^ヲ
擅^ニ志唯打坐^ヲ務め^ル元地礙^ヲ
系別午差^ト謂^フ雖^シ祇管^ニ參禪^ス
辨道^ハ何^レ自家^ノ望狀^ヲ抛^テ志^ヲ
一^歩謾^レ他國^ノ塵境^ニ去來^セん若^シ
一^歩を誤^ル當面^ニ蹉過^ル既^レ人身^ノ
乃^レ機要^ヲ得^タり^レ虛^ニ光陰^ヲ流^ル
る^レ勿^レ佛道^ノ要機^ヲ保任^ス誰^カ
浪^リに石火^ヲ樂^{マン}加以形質^ハ草

露乃如運命^ハ電光^ニ似^タり^レ倏忽^ト
便空須臾^ハ即失^ス其^レ異^ト夫^レ參學^ス
乃^レ高流^久と摸象^ハ習^ム少^ク負^テ龍^ヲ
怪^ム事^ヲ勿^レ直^ニ指^シ單^的乃^レ道^ハ精進^志
絶^テ學^ヲ無^レ爲^ニ乃^レ人^ヲ尊^貴志^ハ佛^ノ乃^レ
菩提^ニ合^テ沓^テ祖^ノ乃^レ三^味を編^テ嗣^ヲ
世^ニ久^クと恣^ニ麼^ニ也^ハ事^ヲ成^ハ須^ニ是^レ恣^ニ
廢^ルあ^ラず^レ寶^ヲ藏^ニ自^レ開^テ受^テ用^ス如^ク
意^カらん

大正拾陸年九月 於 京都

吉野 龍 乃